

『散りぬるを』

事件記録を元にした小説

- 題材：1928年「女性理髪師二名絞殺事件」
- 
  主人公「私」
  - 被害者：弟子の瀧子と蔦子
  - 5年後に調書を読み返す
- 公判記録
  - 一つの「小説」として捉える
  - 人間の解釈や主観が必然的に入り込む

永遠の謎として残る動機

- 
  最大の謎
  - なぜ三郎が2人を殺害したのか
  - 不可解な点が多く残されている
- 解明を試みる「私」
  - 被告人が他界してしまう
  - 真相は闇に包まれたまま
  - 謎が深い余韻を持つ作品に

小説家としての自己省察

- 「私」
  - 「小説」という虚構の域を出ない
  - 創作行為そのものを問い直す
- 表現への限界
  - 「小説家という無期懲役人
- 瀧子の遺体写真
  - 創作への川端の深い省察と葛藤

